

薫物から見る『源氏物語』

——『うつほ』と『栄花』の間——

同志社大学名誉教授・埼玉大学名誉教授 矢野 環

1 はじめに

今年の3月31日まで、文化情報学部におりました、矢野でございます。本日は薫物の話、いわゆる室町時代に成立した香道以前の平安時代のお話になります。

通常、源氏物語で薫物の話というと、だいたいは決まっています。梅枝うめがえの巻にはこういうのが出ている、と。ですから、引用されるのも結構決まっていて、注釈書『湖月抄』などが多いです。それから、後で申し上げる『薫集類抄』、という有名な本があります。しかし、実はどうも間違いもありそうです。それから「源氏物語」よりもむしろ「うつほ物語」の方が生活に薫物が入っている印象があること。そして、「源氏物語」の作った枠組みが「栄花物語」でも再現されています。両方とも女性が書いたから似ているとか言うのではないと思います。

今からのパワーポイントは、いわゆる発表のパワーポイントではなく、どちらかという説明、授業のようなパワーポイントで、文字が多く、参考資料も全部入れ込んでいます。そのため、後で見ていただくときは、非常によく分かると思います。

直前の岩坪先生、あるいは、最初にご紹介いただきました福田先生との共同研究の例として一番近いものでは、今年2020年2

月発行の『香道調度図・香道籬之菊』という本があります¹⁾。これは全体ではなくて一部だけを紹介したものです。いわゆる18世紀香道の到達点であると言えるものです。これは香道の純粋な話に関わるので、本日は詳しくは申しませんが、『香道蘭之園』という有名な本があり、その系統の完全なピークに達したものです。これは通常の本として淡交社から売っております。

2 共起ネットワーク

以下の講演は、通常ならば、梅枝の巻や、末摘花の巻などに出てくる薫物の文章を引用して解釈して、他の薫物の伝承との比較とかがよくある形ですが、それとは全く違う形で行います。まず、原文の引用は直接には行いません。では、どのようにするかというと、源氏物語において薫物という言葉、もしくは薫物の関連する用語、つまり薫物の材料の沈香や丁子など、それから薫物の種類、黒方（くろほう）など、そういう言葉が出てくる文章もしくは段落の中で、どのような言葉と言葉が同時に出てくるかという「共起」というのを問題にします。

そして、同じ立場で「うつほ物語」と「栄花物語」におけるデータを作成し、どのような共通点とどのような差があるかを見ることにします。なお、念のため、最近は皆さんでもこれができるようになってきました。昔は大変でした。特に立命館の樋口氏のKHCoder²⁾を使うと、文化情報学部の4年生など結構、いろんな人が使います。学生でも使えるようになっております。で、それ

を使って、小規模な共起ネットワーク、つまりこの語とこの語が同じような段落に出てきたら、線でつなぐ。いろんな段落で出てきたら更にその線のつながりが強くなるという、ネットワークを作って特徴を読み取ります。

さらに、『薫集類抄』と呼ばれる非常に有名な伝書があります。もちろん、「群書類従」にも入っています。ただ、本格的な研究が始まったのは2010年代です。それについての伝承を少し見ることにします。

3 薫物とは

さて、薫物（たきもの）は、全然知らない方にとっては何のことやらというわけです。まず、薫物とはどういうものであったか。輸入品の中国、南方から大変高級な輸入品をなんと粉にして混ぜ合わせるという、大変費用のかかる話です。源氏物語そのものにはどれとどれをどれぐらいの配合で混ぜなさいとは書いてありません。「湖月抄」とかの解釈書にはもちろん注釈が書いてあります。輸入品とはどういうものですか、というのですが、今の輸入品とはちょっとまた違いますから、なるべく、源氏の時代に近いもので、しかも最古の往来物と呼ばれている『新猿楽記』というのがあります。これは猿楽を見に行った、こんなのがあったという報告のついでに、それに関係する言葉を羅列した、いわゆる往来物です。作られたのが1050年前後です。割と近いわけです。その唐物というところには、表題のところにありますように、

唐物：沈、麝香、衣比、丁子、甘松、薰陸、青木、龍腦、白檀

と出てきます。まさに、これが全部薫物の材料です。ただし、薫物以外にも使っていました。

ちょっと、衣比（えび）というのは聞いたことがないという方があるでしょう。つまり沈、丁子、麝香、は聞いたことあるけど、衣比は知らない方があるかもしれません。これはちょっとややこしいものです。調合するのですが、薫物にしなかった場合もあります。古いものは正倉院の中に衣比香と言われているものがあります。正倉院には昔は知られてなかったんですが、精密な調査で実は薫物が出ているのです。ただ、いつのものか、まだ正確には分かりません。

さて、下に説明文が書いてあります。最初に申しあげましたように、これは発表用のパワーポイントではなくて、授業用パワーポイントです。薫物は唐物としての位置づけである沈、麝香、丁子とか、それから附香剤（少し意味が違うが、保香剤とも呼ぶ）とは、ちょっと変わっていますが、香りが布に付きやすいようにする薬です。そういう、甲香と呼ばれるものを混ぜ合わせます。

さらにその全体をまとめるために多糖類、粘り気のある蜜などで練り合わせます。どんな材料かは、次に見えますが、その結果について名前を優雅につけます。

梅花、荷葉、菊花、侍従、落葉、黒方、

通常、この順序で呼ばれることが多いのですが、実は「黒方」が特別に重要です。昔からあります。例えば、紫式部日記には黒方しか出てこない。梅花、荷葉とか出てこないのです。

だから、薫衣香といって、いかにも衣に香らせるお香というのは、細末の場合もあり、衣比香と同じ場合もあります。但し、衣比香そのものが輸入品だと思われる場合もあって、衣比香だけちょっとややこしいことになっています。

さて、これは香老舗松栄堂のサイトからどんな見かけのものか、写真を借用しました³⁾。左の方の沈香、下が白檀、その右側に丁子があります。この3つが最も重要な材料です。白檀はあんまり使わない場合があります。その他奇妙なものがいっぱいありますね。安息香はいかにも樹脂みたいなものです。西洋で使えそうなものです。隣の龍腦はちょっと珍しいものです。樟腦のようなものだと思います。右の桂皮がシナモンです。その下の大茴香というのは、中華料理の中でお使いになるものです。その一番右の貝というのは、附香材、布に附すという意味の「附」です。これは本来重要なのは、貝の蓋の膠質の部分です。作った結果は、非常に細かくして、先ほど言ったように練り合わせるんですが、最近は、というかだいぶ昔から炭の粉を入れるようになりました。だから、真っ黒けになっていますが、黒い唐物の材料があるのではありません。

これぐらいの感じです。だいたい大きさはお分かりいただけると思います。右側がハマグリだと思ってください。それの中であるぐらいです。これは今、お香の方の人よりもお茶の方がよく

知っていて、お香の方では薫物を作るのは秘伝のようにしているか、今は行いません。室町時代以降は、沈香を直接たくというのが香道の姿になっていくのです。薫物の文化は、公家において伝承されました。

というわけですが、これは実際に製品で売っているもので、右が松濤という名前がついているものです⁴⁾。色々な薫物を香のお店で売っています。

4 坂道アイドルと薫物

ところで、「令和時代の古典の楽しみ」とうことなので、最近の坂道のアイドルで、誰がどれに似合うかなというのを、原書とか源氏物語に書いてある文章と、本人のイメージから考えましょう。

表1 坂道アイドルと薫物

▶ 日向坂 46	宮田愛萌	黒方	齋院の方	奥ゆかしい
▶	河田陽菜	侍従	源氏の方	艶 優美
▶	濱岸ひより	荷葉	一風変わった	しっとり
▶	上村ひなの	薫衣香	公忠の方なの	優美さ
▶	金村美玖	菊花	露に薫り水にうつす	
▶	高本彩花	落葉	紅葉散頃の薄の装	オチ付
▶ 乃木坂 46	筒井あやめ	梅花	華やか	当世風
▶	北川悠理	衣被 (衣比、褌衣)	香	難解
▶	(衣被 (えび) 香	は「末摘花」と「初音」	に一例づつ)	

まず、2人は確定です。日向坂46の「宮田愛萌」は黒方。この方は大学の国文学科で源氏のことをもちろんよく知っているがさらに、万葉集を2年間いろいろ調べたそうです。源氏で言うと「黒方 斎院の方」で奥ゆかしい香りだと思っています。なお、「方」とは調合する「処方」のことで、提案者の名前をつけてよびます。

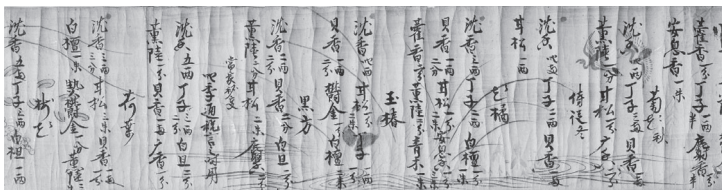
もう一人確定なのは、乃木坂46の4期生の「筒井あやめ」さんは、華やかで当世風でぴったりしていて、しかも和風。これは紫の上風で「梅花」が似合うでしょう、ということになるんです。結構見つけられるんですね。ちょっと和風のとかちょっと変わった人とか。また、日向坂46の、河田陽菜さんは「侍従 源氏の方」、濱岸ひよりさん「荷葉」、上村ひなのさん「薰衣香 公忠の方」と。菊花、落葉は源氏には出てきませんが、それぞれ金村美玖、高本彩花お二人に当てます。一番下の方はちょっと変わっています。乃木坂46の北川悠理さんは小説を書いています。本人自身が難解な方で、「衣比香」でいいかと思います。だから現在でも生かすならいかせます。他にも坂道がありますが、やっぱりこの辺の人が一番向いている。それから、手違いがあったようで、薫集類抄では、菊花と落葉が同じ処方になっています。しかし、実は違います。あれは唯一の手違いだと思います。

5 薫物の伝書『薫集類抄』と処方例

例えば、薫物の本と言ったらどんな感じになっているかという
と、これがその実例です。これは私の本で簡単な本です。三条家

からみで、きちんと何をどれぐらい入れてというのは、簡単に書いてあります。これは翻刻と一緒に公開されております⁵⁾。

図1 竹幽文庫本 薫物記

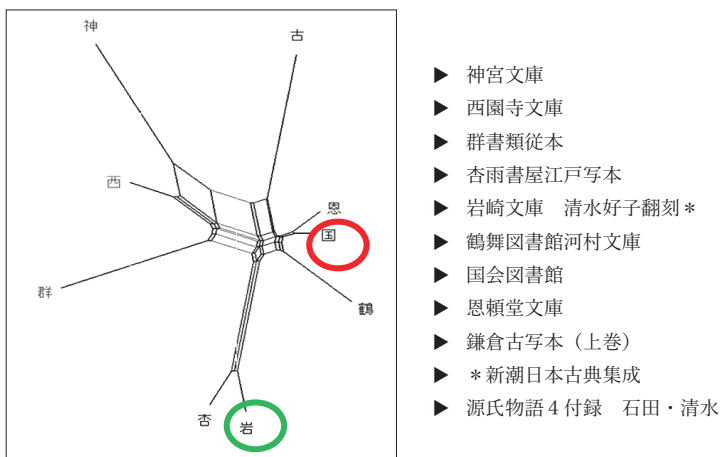


より詳しい本については、特筆すべきは、とにかく田中圭子さんが、『薫集類抄』の研究をされておられます⁶⁾。これは博士論文、莫大な量の翻刻が全部で、実は序章を書く前に指導教員に渡したという。その指導教員の藤河家先生も薫物の研究があります。で、『薫集類抄』というのはそれほどひどい異本はありません。源氏で言うと若紫でしたか、500字ほど書き入れられてるのがありますが、それほど、異本はないけども、やはり少しずつ本が違ってきます。ちょうど福田先生との授業で学生にそういうことの処理の仕方を教えたことがあります⁷⁾。

そういう本だけでは仕方ないので、薫物の実習も行いました。ちなみに私も最初、45年ぐらい前に松栄堂の前の社長が薫物の講習会をされたんですね。正確に全部使ってやるんじゃなく、事前に少し混ぜてある材料を使いました。授業のときはそうではなくて、高橋美都先生がいろんなセットを買ってきてくださいましたので、それで行いました。その上で、写本の差を見つけましょう、

というふうになりました。9つの写本があって、これもネットワークの一種です。これは今回言っているネットワークとは別です。系統樹が、ネットワークになった、系統ネットワークというものです。

図2 SplitsTreeによる結果のネットワーク



だいたい近いところにあるのが、共通性があると思ってください。この書き方だと真ん中で左右に分かれています。左の神宮文庫、西園寺文庫の薫集類抄があります。群書類従本は、とにかく何かひどいことを言われることが多いですが、薫集類抄に関してはそれほどひどい本ではありません。

右の方にいろいろあって、国会図書館本が最も重要であるという意見ですが、そこから下の方に伸びているところに、杏雨書本

と岩崎文庫があります。これまで源氏物語の報告はよく出ていますが、薫集類抄の翻刻を付録に載せたというのは、たった一つあります。それが『新潮日本古典集成 源氏物語 第4巻』に付録として翻刻されています。だから、よほど重要なことと石田穰二・清水好子両氏がお思いになったんだと思います。

さて、薫集類抄にいろいろな調香の人が出てきますが、ここはプロ向けに多めにしています。重要な人、源公忠という方などは、たくさん処方が残っています。梅花、侍従、黒方、荷葉、薫衣香に対してどれぐらいの処方が書いてあるか。源公忠では、2個1個1個2個2個と結構ありますね。8つも処方が残っています。

表2 『薫集類抄』における、調香者による処方の数

菊花、落葉 0	27	22	22	3	4						
	梅花	侍従	黒方	荷葉	薫衣香		梅花	侍従	黒方	荷葉	
閑院大臣冬嗣	1	1	1			東三條院詮子	2				
賀陽宮	1	1	1			小一条皇后城子	3	1			
滋野宰相	3	2	3			山田尼	2	1	1	1	
四条大納言源定	2		1			二条関白藤原教通	1	1	1		
八条宮本康親王	1	4	3		2	堀川右大臣藤原頼宗	1	1	1		
小野宮惟喬親王	1	1				参議藤原師成	2	1			
染殿宮貞保親王	1	1				朱雀院			1	1	
源公忠	2	1	1	2	2	藤原致忠			1	1	
大和常生	1	2	1			藤原保昌			1	2	
八条大将藤原保忠	2	1	1			藤原国幹				2	

それから、右の方の上から3人が山田尼という方も作り方の詳しいことを知っていた方で、割と有名です。ちなみに、右側の一番上にあるのが、東三條院詮子で、これは紫式部日記で出てくる方です。そういう方たちがいろいろ作ったというのを集めています。

す。あくまでもこの5つが薫集類抄においても主体です。梅花、侍従、黒方、荷葉、薫衣香。歴史的には黒方が一番古い、となっております。これはちょっと見ていただくと分かると思います。ああいうデータからでも、いろいろな図を作ることができます。そうすると、源公忠だと、八条宮と山田尼が5つの薫物の調合のバランスからいうとこんな感じになる。源公忠は荷葉も薫衣香も作っている。荷葉と薫衣香は元々少ないですね。このように、全体で3個と4個しかありません。ほかが二十何個に対して。だから、そういうのは、端の方に引っ張られるということがあります。左の方は5つの薫物に対して先ほどの宮田愛萌とか、筒井あやめとかを配置したのですが、これはさほど意味はありません。

では、これは3つの薫物でこういうこともできます、ということの例です。それはともかく、さて、これは皆様が自分で同じようなことをするためにどういうものが必要か、ついでに入れてあります。源氏総索引には勉強出版が出しましたものがあります。自立語篇、付属語篇です。それを見るのは確かにいいのですが、昨今は検索もできる。特に渋谷栄一先生のデータをもとにして検索するのは、大変よくできてます。それからあと、上田英代さんがいろいろな物語を検索できるようにしておられます。それから伊藤鉄也先生の湖月抄の検索はできるはずなんです、今サーバーの整備中か何かでちょっとうまくいきません。だからそういう検索サイト検索することもできます。というわけでご参考のために⁸⁾。

そうすると、薫物、もちろん表記はいろいろです。現在、たき

物、合薫物。空物というものも全部含めて、薫物という言葉がどれぐらい出てくるのでしょうか。それから昔から一番重要な黒方はこのようになります。だいたい古い順に並べてありますが、「大和物語」に薫物という言葉が出てくると、それから有名な「天徳四年内裏歌合」の三条西家本だけですかね、ちょっと異本の差はよく知らないのですが、「薫物は黒方なり」という文章がある。調度品ばかりです。

表3 物語本文に現れる「薫物」「黒方」の件数

薫物(たき物, 合薫物, 空薫物等)				
延喜式(924), 和名抄(934) たきもののこ(籠)				
小学館新編日本古典文学全集				
	薫物	黒方	行	
大和物語	1	0	2655	10c
天徳四年内裏歌合	1	1		10c
うつほ物語	22	14	24362	10c
落窪物語	1	0	4933	10c
枕草子	3	0	7041	11c
源氏物語	11	2	37426	
紫式部日記	4	1	1072	11c
大鏡	1	0	6083	11c
栄花物語	16	1	22879	11c
宇治拾遺物語	3	0	8366	13c
堤中納言物語	2	0	1499	13c
夜の寝覚	7	0	8272	14c

なんと「うつほ」は多いですね。薫物が22、黒方が14あります。源氏は実はそんなに出てこないんですよ。薫物という言葉は11回、黒方が2回出るだけです。「栄花物語」が薫物という言葉は16回、黒方が1回出てきます。とかいろいろであります。

6 共起データの取り方、表し方

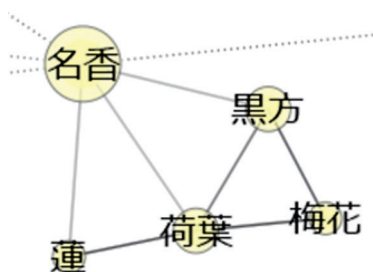
この表、どうやって調べたんですかというわけですが、その前に、このような言葉が何回ですかというだけではなくて、当初言いましたように、どの言葉とどの言葉が文章もしくは段落の中で同時に出てくるかを考えます。こういうテキストは自動処理をよくするんですが、自動処理は行いません。完全に必要なデータだけを取り出します。

例えば、

紫の蓮を整えて荷葉の香を合わせたる、名香

これは仏前に供える香なので、「めいこう」ではなくて「みょうごう」です。必要な言葉として「蓮 荷葉 名香」だけ取ります。そういうふうにして、これだと、その3つの言葉が共起している。共に起こっていると見るわけです。それがうまく反映させれば、右上の方に、上の方に図が描いてございます。

図3 共起ネットワークの例



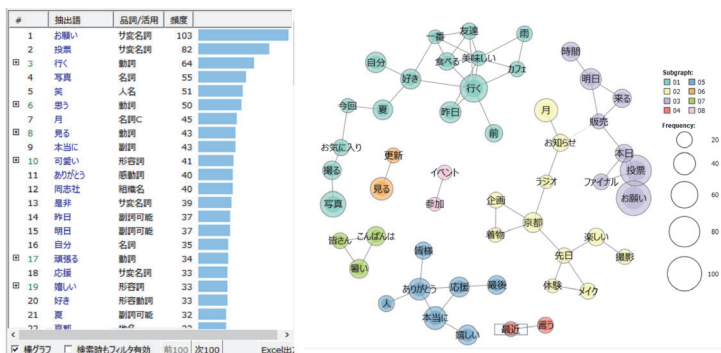
丸の大きさは出現する回数に比例します。小さい蓮は無理やりちょっと取ったのです。1回分です。あとは荷葉と名香と蓮が黄色い丸のところではつながっています。その隣の方では、名香が下に来ていて、荷葉と蓮とに薄くつながっています。ともかく、このように一緒に出てきているのが、どれくらいあるか、ということを考えながら処理します。

苦情が出る可能性が先にあります。それでは、内容を見ている、文章を理解しているわけではないのではないですか、ということになります。文章にどのように扱われているか、見ているから、文意は内包されているといえるわけです。では、肯定文か否定文かという細かい話は、今回はあまり関係がない。それから、作品全体における出現の様子を見ているわけです。単なる語の集計ではないから、どれとどれとが同時に使われるかというのを見るので、よりうまく解釈ができることになります。

では、線の太さとか、あるいは何回表記したかとかやるんですか。それをどうやって正規化するんですか、というのですが、それはいろいろ基準がございます。Jaccard 類似性という、つまり、A と B については合併した全体のうち、共通部分がどれくらいあるかというのを、重複度を考慮して見るというのがあります。それから、cosine 類似性というのは、数学の cosine (コサイン) ですが、そういうものもあります。テキストマイニングでは、Jaccard、長い段落ばかりでやるなら cosine とか言われていますが、だいたい安全のために両方でやった方がよろしいです。そのようなことを行います。

これは学生の卒業研究の例です。ミスコンのファイナリストの Twitter でどういう語が共起するかといたら、当たり前みたいな共起もあります。これ実は右の方に大きな丸があって、「お願い」「投票」というのが同時に出てくる。それはそうでしょうね。あと「行く」とか「写真」とか「本当に」とか。これは実際に卒業研究をした、しかも自分自身もファイナリストになったことのある学生の卒業論文の一部です。このように本当に使われております。右がネットワーク、左が出現度数です。単に何回出てくるかを確認し、つながりは別に見る。このように、一応両方見るのが、基準になっています。

図4 語の出現度数と、共起ネットワーク。ミスコンファイナリストの twitter 例。



今回は名詞ばかりだからほとんどいいのですが、動詞とかの場合は、活用形を全部区別した上でひとまとめにするといったこと

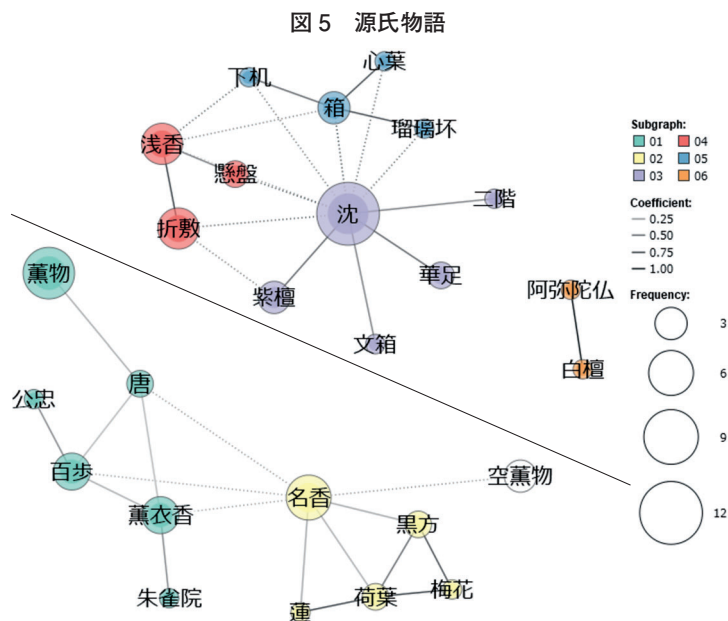
が必要になります。しかし、それはともかく、何個の文をとって、どのようにするのか。文でいうと、2文とか3文で近接しているのは一つの段落のようにみなして、それでもう一文とすることもあります。今からA(B)となっている場合は、延べ語数がA、異なり語数がBとします。異なり語数が違う言葉です。延べ語数というのが、その重複も含めた回数です。さっきみたいにブツブツに切らないといけないのですか、ということですが、そうではなくて、「沈の箱」とかいうのは、当然、日本語の文法で解釈しますから、ちゃんとうまくいきます。

さて、これが採用した元のデータだと思ってください⁹⁾。どういう意味でしょうか。まず、源氏は、さっきも言ったように、ちょっと段落ぎみのところもありますが、44個の文、たったそれだけですか、と言われることがあります。そうなんです。その程度です。うつほは42の文章。栄花物語は32の文章です。その中で延べ語数は、源氏で116、うつほで150、栄花で87。異なり語数がだいたい30語ぐらいです。おのおの出方がだいぶ違います。うつほの一番上にあるこれは黒方で14回出てきます。その次が沈香の沈です。沈香という出現は昔の本には全くありません。別の表現はちょっと出てきます。

いずれにせよ、沈が上です。源氏だと沈が12回。栄花物語は沈が11回です。ところが、この沈という言葉は、実は薫物以外の話に使われていることが大変多いのです。

7 三物語における、ネットワーク

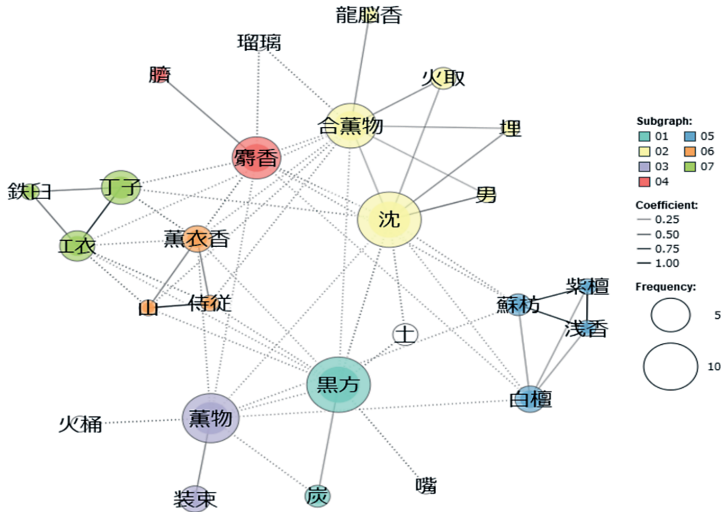
「源氏物語」を見てみましょう。こういう格好になっております。上の沈の12回分とつながっているのはなんでしょうか。二階、華足、文箱、紫檀。紫檀と沈のなんとかとか。沈の左を見ると、懸盤、折敷、その向こうが沈香より安物の浅香というものです。浅香の右を見ると、下机とあります。沈の上の箱。要するにこれは調度品とか、文具とか、そういうのばかりです。白檀の阿弥陀仏とか。



薫物の材料としての沈という話は全然出てこない。下の方にあるのが、薫物関係で、空薫物と薫物は別にとってあります。薫物が、唐の百歩の薰衣草とか、ペアで出てきたりする。百歩の薰衣草というものがよく出てくるので、丸が少し大きいです。薰衣草は朱雀院の方とかに出ています。百歩は公忠の方とかに出てきたり、それから右の方に名香とか。ここに黒方、梅花、荷葉とありますが、出現度数が非常に少ない。つまり、調度品の話にしか沈が出てこない。案外、そういうものなのですね。今はそうは思いませんが。

「うつほ」はどうでしょうか。これは混ざっております。例えば、沈のところを見てもらうと、沈の男、合薫物とか。火取りに合薫物をくべてとか。合薫物の龍腦香とか。埋というのが、もう少しで出てきます。沈の男は何か。要するに、沈香で作った小さい人形です。そういうものが、よく展示されたという例は後ほどお見せします。

図6 うつほ物語

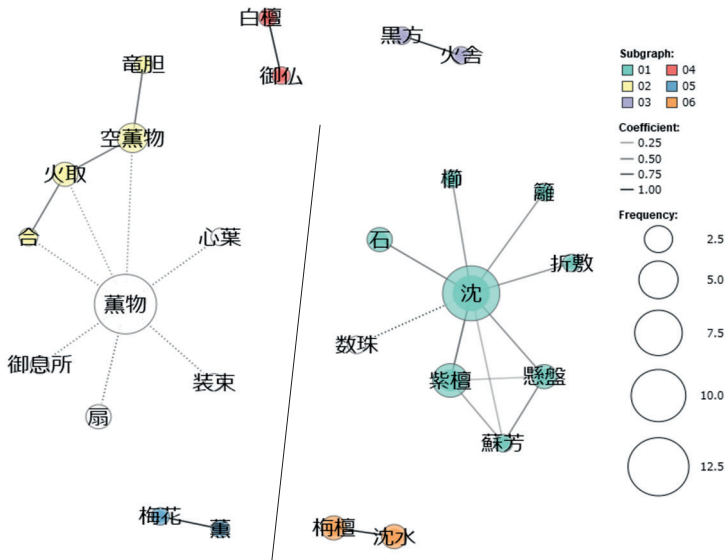


左に麝香があります。その赤い麝香の左に緑で丁子があつて、丁子と工衣、鉄白で磨るとか。その下にオレンジで薰衣香があります。侍従と一緒に出てきます。そこに山とは何か。これも薫物で山を作る。それもよくあります。黒方は大変よく出ていて、黒方の下に炭があります。これも薫物で炭を作ったんですよ。で、左に薫物とあるし、それから、蘇枋、紫檀、浅香と、渾然一体としています。分かれてない。いろんなところにいろんな状況で出てきて、原文を見ても面白いのです。

栄花物語を見ると、沈の数珠だとか、沈、懸盤、蘇芳、沈の石、これは、沈香を掘った。沈の船というのもあります。左の方が薫

物です。心葉、空薫物、竜胆、なぜ竜胆を入れたのか事情があります。少し梅花が出てきます。

図7 栄花物語



梅壇と沈水、沈水というのは経典の言葉として、しばしば使われております。梅壇と沈水というのは、薫物の原料ではなくて仏教です。梅壇と沈水云々というシチュエーションに類するところで使われています。というわけで、今、見ますと、一番古いうつほの段階では、このように非常に渾然一体としていたのが、源氏でどうも分かれている。栄花もそのようなものを引き継いでいる。

これだけの例からあまり一般化はすべきではないのは当然なんです。が、実は材料が少なくて、この3つぐらいしか、大量に出てくる話がないんです。

8 沈、薫物を用いた作り物

ところで、先ほど変なことを言いましたが、「沈の男」とか、「薫物で山を作る」とか、どういうことですかと。これが東京成徳大学にある天徳四年の内裏歌合にある、左方右方の州浜です¹⁰。なんでこんなところに置いてあるのかよく分からないのですが、明らかに階段です。左の方の州浜は鳥2羽が向かい合って何かしております。そこの奥のところちょっと黒いものが見えます。あれも沈の山かな。ああいうふうなところに、沈香の作りもの、あるいは薫物を固めたものを使います。基本的に州浜は作り物で左みたいなもの。類聚雑要抄に出てくる左方と似ている州浜の絵をちょっと小さく入れてあります。

下にあるのが右方の州浜です。そこに船がありますね。これは天徳四年内裏歌合の文章のところにはっきり沈の船と書いてあります。つまり、沈香を削って船の格好にしたのを置いているわけです。いかにも、もったいない感じがしますが、もちろん削った粉はまた薫物に使えばいいです。その奥の方に人が見えます。ああいうのも沈香で作ったり、もしくは薫物で作っていました。つまり、沈とかそういうものの重要性は薫物よりもむしろそういうふうにかかったのです。

天徳四年内裏歌合が絵合に非常に影響していることは、ずっと以前から指摘されています。極端に言えば江戸時代からです。薫物の実態に沿った梅枝の巻というのは、実は全体的に言うと結構珍しい話です。よくああいうものが書き残されたといえるものです。

9 おわりに

ここで、全体を図式化したものを与えておきます。

図8 全体の俯瞰図

薫物伝承 唐物 天徳四年内裏歌合 960 調度
総合 混然
うつほ物語 10c
源氏 梅枝 画期 源氏 絵合
以後伝承 新猿楽記 1050 ± 20
栄花物語 11-12c 初
薫集類抄 1160* 類聚雑要抄 1146 (末尾 薫物伝書)

天徳四年のときには、薫物も話に出てくるけれども、調度品みたいなものが多かったわけです¹¹⁾。「うつほ」と「栄花」とはだいぶ違いましたということです。つまり、総合的なものが分化して並列しているような現象になっているように見えるというわけです。唐物を、天徳四年内裏歌合みたいに調度品として使う。これは960年なわけです。薫物の伝承というのは両方ありました。

それが「うつほ物語」のころには、渾然としているが、なぜか紫式部は、梅枝の巻、総合の巻に別扱いのような感じで書いています。

それから50年後ぐらいの『新猿楽記』でもやはりそこをもう一度引きましたが、唐物という輸入品のところに、沈、麝香、衣比、丁子、甘松とか出てきます。衣比が出てくるのがちょっと不思議です。「栄花物語」もそうになっています。それらが出た後の、ちょうど1150年前後に重要な薫物の本が編纂されます。それが『薫集類抄』です。もう一つが『類聚雜要抄』です。ご存じの方も、あるいは調度品が書いてあるのではないかと思われる方もあるかもしれませんが、末尾は薫物の伝承です。ちょっと右に黒方と書いてあります。

これが実はセンスが全然違うのです。類聚雜要抄はおそらく、伝統的な伝わっていた伝承をそのまま使っています。薫集類抄の方は完全に編纂してしまっています。私が思うには、落葉と菊花のところは間違えた。しかしそれがずっと修正もされずに残った。というふうなお話であります。つまり、いろいろなことがありましたが、参考図の出典とかそういうのも全部入れてありますので、皆様が後で確認されるときに、ご覧いただければと思います。

それでもう一つ伝承が分化した話があります。薫物を作った後で、土中に埋める。それで発酵させるのだとか何だかんだという意見がありますが、発酵するわけではない。香りが落ちつく、うまく馴染むということのようです。

実は松栄堂の昔の庭には、確かに大きな甕を埋めていたと聞き

ました。水のあたりに埋めていた場合と、それから、梅の木の下に埋めるという伝承が両方とも存在しています¹²⁾。こういうふうには、伝承が分化して、何か全然違う格好で伝わっていくということはよくあるように思われます。

で、以降は参考資料で今、お話しいたしません。後で見てもらえるようにしてありますが、実はこれの最後に類聚雑要抄から少しだけ引用もしてあります。ここを見てもらうと落葉と菊花は全然違う手法が書いてあります。

そのことだけ申し上げて。もちろん、梅枝の巻は非常に貴重なものですが、他のものも広げると面白いのではないかというお話でした。

注

- 1) 矢野環・岩坪健・福田智子 『香道調度図・香道籬之菊 一竹幽文庫の香道伝書』（淡交社）2020
https://www.tankosha.co.jp/ec/products/detail.php?product_id=2447
- 2) 樋口耕一氏の KHCoder。 <https://khcoder.net/book.html>
- 3) <https://www.shoyeido.co.jp/incense/material.html>
- 4) 「松濤」（裏千家 坐忘齋宗匠御好 10g）。
<https://shop.shoyeido.co.jp/shop/g/g232341/>
- 5) https://doshisha.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=19703&item_no=1&page_id=13&block_id=100
- 6) 田中圭子 『薫集類抄の研究一附・薫物資料集成』（三弥井書店）2012
- 7) 田中の9写本を対象に同志社大学文化情報学部の授業で取り上げ

た。

矢野・高橋・福田 薫物の視点から探る日本の伝統文化 — 『薫集類抄』をめぐる数理文献学的考察— 2016

http://www.bunkajoho.org/journal/img/jissen_5.pdf

- 8) 上田英代・村上征勝・今西祐一郎・樺島忠夫・上田裕一
『源氏物語 語彙用例総索引 自立語篇、付属語篇』 勉誠出版
サイト1 源氏物語 佐藤和雄 on 渋谷栄一氏のデータ
<http://www2s.biglobe.ne.jp/~ant/genji/genji.html>
サイト2 上田英代 新編日本古典文学全集基準 各種物語
<http://www.genji.co.jp/kensaku.htm>
サイト3 伊藤鉄也 湖月抄の検索 (現在整備中か?)
サイト4 検索サイトの検索
<https://yatanavi.org/textserch/index.php/search>
- 9) 使用したデータ内訳。文の数と、延語数 (異なり語数)
源氏 44 文 うつほ 42 文 栄花 32 文
116 (30) 150 (29) 87 (29)
出現語の一覧は省略します。
- 10) 東京成徳大学・伝統文化資料室。天徳四年内裏歌合の左右の州浜
<https://blog.goo.ne.jp/seitokudento/e/8ae32cfd9b8a87bc3ca2108d7b77a44f>
嵐山 時雨殿で展示されていた人形については、下記参照。
<https://blog.goo.ne.jp/luna2816/e/f5f3bc143d488394e53b86be86b5592f>
- 11) 歌合では、歌そのもの以外にも重要な情報がある。かつて指摘したことであるが、永承五年 (1050) 『祐子内親王家歌合』には「銀亀を以て薫炉と為す雲母炉に在り」(原文は最後に) とある。さらには、鶴の州浜もあった。これは、香炉と雲母の結びつく最古の例である。それ以降、雲母を用いることは長く忘れられ、室町時代に沈香を単独で焚く時代になって復活した。

(原文)「以銀亀為薰炉在雲母炉 香四散蘭奢漫薰 置州浜立沈香
右州浜上立銀鶴一双 為箸匙台」

- 12) 薫物を作成後 土中に埋めることに2通りがある。御所西の遣水の
辺りに埋めたとする(正統な)伝承に『源氏物語』は準拠しており
六条院においてそれに相当する場に埋めている。梅の木等の下
に埋めるという伝承もあった。『堤中納言物語』はそれに従う(松
栄堂嵐山店 武田店長示唆)。土に埋めることは共通するが水の辺
りの一定の温度という観点と香り高い木の元に、という2つの伝
承が受け継がれている。

補注1 講演時の質問に関連して。

「香(こう、か)、薫り、かほる、匂」これらの詳細な検討が必要
だが今回は触れなかった。

源氏ではとかく、匂ふ兵部卿、かほる中将という対比が話題とな
るが、「かほる」は「かほる中将」に絡んで3回でてくる以外は2
例しかない。「匂」は、色についての表現もあるが、香についても
多い。「うつほ」から「源氏」に至り、視覚と嗅覚を分離して記載
したともいえる。天曆歌合は、視覚と聴覚の世界である。

補注2 言葉の出現に関する数量的研究の古い例としては、有朋堂文
庫を用いて、古事記から明治時代の四件までを含む四十六件の物
語などから実際に検索した労作がある。語は、「あはれ、をかし、
さびし、かなし、おもしろし、さうごうし、さび」である。その
一部と「薫物」の出現を現在の検索機能により集計すると次の通
りである。

上村悦子『「あはれ」及び「をかし」の帰納的考察』、『日本藝能史
講話』163-186頁、昭和24年12月。

補注3 全ての図表は、著者が作成したものである。

補表 あはれ、をかし、かなし、おもしろし と 薫物

		あはれ	をかし	かなし	おもしろ	計	薫物	行数
1	源氏物語	1029	674	401	149	2253	11	37426
2	栄花物語	815	389	279	56	1539	16	22879
3	うつほ物語	306	199	185	65	755	22	24362
4	枕草子	89	440	6	13	548	3	7041
5	夜の寝覚	255	66	76	14	411	7	8272
6	狭衣物語	202	75	97	5	379		11294
7	落窪物語	84	95	35	5	219	1	4933
8	蜻蛉日記	105	54	54	5	218		3752
9	大鏡	77	34	38	6	155	1	6083
10	宇治拾遺物語	66	30	52	0	148	3	8366
11	大和物語	54	22	38	16	130	1	2319
12	更級日記	50	33	18	5	106		1306
13	堤中納言物語	36	48	6	4	94	2	1499
14	紫式部日記	16	44	3	11	74	4	1072
15	和泉式部日記	38	19	8	0	65		949
16	讃岐典侍日記	37	3	15	3	58		1403
17	平中物語	11	17	1	19	48		1200
18	伊勢物語	16	4	13	13	46		1571
19	土佐日記	6	2	11	7	26		610
20	紫式部集	8	2	6	1	17		686
21	竹取物語	6	1	7	3	17		915
		3306	2251	1349	400	7306	71	147938